



感 慨

尾 形 敏 彦

白駒の隙を過ぐるが如くに、はや、懸車の年になったかと驚くばかり。浮生は夢か。「げになにごとも思い出の、人には残る世の中かな」(能『井筒』)と身にしみて思われる。思い出に残らないものは無に等しい。幼稚園から大学

まで、山ほどの思い出があるが、病気も知らず、呑気に遊び暮したようなものであった。とくに、旧制高校時代は私の人生の花で、数え切れないほどの楽しい思い出に溢れている。京大で卒業論文作製にとりかかろうとした時、第一回学徒出陣に見舞われた。その時、落合太郎教授だけが「なんとしてでも生きて帰れよ」と囁いてくれた。二等兵になって間もなく中隊附の一少尉に呼び出され、「兵隊生活は奴隷生活だと思えばいい」と教えられた。京大の卒業生だとしか名乗らなかった彼は後にビルマで戦死したと聞いた。辛い時には「今は奴隷だ」と思うと気が楽になった。名も知らないこの先輩には今も深く感謝している。見習士官になると中国へ転属した。南京では中山陵に詣で、北京では長城や紫禁城に圧倒され、幾人かの親切な中国人と知人になったが、間もなく作戦師団に配属されて一路南下した。黄河も臥竜崗も素晴しかった。行軍中に遙かに見える一条の白雲が天山山脈の頂上だと教えられた時には感動した。軍中に礼なし、兵に常勢なしで前進した。前線ではひどい目に遭った。その結果20年7月に山口県特牛に上陸することになったのであるが。自分が大陸的な人間だと思えるほど私には中国の印象はよかった。その後、しばらく漢詩に凝った。

帰学すると、頭の整理を兼ねて、通訳、演劇、新聞、宗教などに精を出し

た。軍服や長靴で通学する連中もいた。放歌高吟したり、ドブロク茶わんを片手に徹夜でマージャンに興じたり、映画のアルバイトに出たり、下宿を頻繁に移ったりしたのもその頃であった。誰も皆やりきれない気持ちにかられていた。これではならじと思って、書いていた論文がようやく仕上がった。我が青春に悔はなかった。大学院では石田憲次教授と中西信太郎助教授の研究室のお世話をすることになった。半年たつと、「決して要求するな。頼まれたことは断るな。」という座右の銘を下さった石田教授から就職するように命じられた。医専と特研究生と高野山大学の3つから選べということであった。しかし、教授の意向で京大付属医専に落ち着き、医学部の自由選択英語と看護学校の英語を兼担させられた。こうして好きな道への第一歩を踏み出した。

アメリカ留学中は我ながらよく学びよく遊んだ。休みにはアメリカ中を見て回れとすすめられたアレン・テイ特教授には感謝している。アラスカ以外の全州を自動車と飛行機で訪ねた。「美は百能、金は万能」(“Beauty is potent but money is omnipotent.”)のアメリカ生活は馴れると非常に暮しよかった。思い出は尽きない。

回顧すれば、恩師達は燃犀の士であった。無能な私などは開き直って、小水は大舟を容れずとうそぶき、浅い川を深く渡っているのだと自分に言いきかせる以外に道はなかった。虚勢を張っていたわけである。少壮幾時ぞと思いつつも、なお希望を高く抱き天界を遠望する気持でいたのだ。青雲八町に過ぎないことは昔からよく分っていたのだが。40歳中頃までは一醉千愁を解くと決めて、酔って2階から落ちた日まで晩酌一升を続けていた。痛みがとれると、時至れば鉄も金になるとか、十年河東、十年河西、氣に病む要なしとほざいて盃を手にした。しかし、晩酌二合が精一杯になっていた。昔千里も今一里で、堅白同異を論じるのは大中の小中だと自分を欺き、滄浪の水清まば以て吾が纓を濯うべしと口誦さんで、流れ渡りの世の中に身をまかせている。陳陳相因のことを語って橘中の仙に籠るというようなことは考えてみたこともない。

情熱が去ると形式が到来すると言うが、老いの入り舞いをするのは胡蝶の夢を痛感させるだけで淋しいと思う。むしろ、驢事未だ去らざるに馬事到来するのを如渡得船と考えて、昨日の淵は今日の瀬だと知りつつも山伏の門出の仕儀

を守ろうとして筆を動かしている。三利あれば三患ありというエマスン流の考え方に立脚して、日暮れても路岐に迷わぬ行人のふりをしている。研究の道に、酒色の道に迷ってきたが、昨今は「迷うが故に衆生なり、悟りて後は仏もなし」（馬琴）とか、「いづれの時か夢のうちにあらざる。いづれの人か骸骨にあらざるべし」（一休）というような言葉にも興味を覚えるようになった。人あれば人情ありで、好死は悪活に如かずであろう。しかし、何事も時期次第で、春になれば草は生じるであろう。「死生命あり」とはよく言ったもので、天命には誰も逆らえまい。かつては、人生意気に感じては功名誰か論ぜんやと肩を組んで歌った青年達であった。今は、「世の中は何にたとえん水鳥のはしふる露に宿る月影」などつつぶやく老人達になってしまった。ビルマで激戦を体験した私の金蘭の友は何事にも驚かない超然たる人間である。私は今頃になって、彼こそは稀なる一種の死人（しびと）だということが分った。「過去を追うな、未来を願うな」とか、「生や全機現、死や全機現」というような言葉は東西の達人が語ってくれた。行きつくところは「不立文字、教外別伝」ではあるまいか。しかし、今、言葉として最も惹かれるものは「色身不二」と「一切皆空」とである。